追　悼

木村有香先生（1900 − 1996）
Professor Dr. Arika Kimura (1900 − 1996)

木村有香先生は明治33年3月1日石川県に生れ，平成8年9月1日老衰のため仙台市のご自宅で逝去された．分類学者として日本の最長老で，96歳のご長命であった．先生は大正14年3月東京帝国大学理学部植物学科を卒業，同大学大学院に進み，昭和3年4月東北帝国大学理学部生物学科助教授，昭和22年1月教授に昇進，東北大学理学部生物学科第三講座を担任し，昭和33年初代園長として後に国指定の天然記念物となった東北大学理学部附属植物園の基礎を築かれた．昭和38年3月63歳で退官，以後お亡くなりになる1年前まで32年間植物園内ヤナギ標本館で研究を続けられた．先生のご紹介で昭和62年4月には先生のお弟子であった名古屋市津田 弘氏から東北大学理学部に植物標本館（植物園記念館，通称津田記念館）を寄付していただき，これを植物園内に建設できた（大橋 1987）．



木村有香（1900-1996）
Arika Kimura (1900-1996)
1989. 2.13写

先生はご生涯をヤナギ科植物の分類に専念された．鹿児島の七高時代はシダの分類に興味をお持ちであったそうだが，大学2年の時に，早田文蔵先生からヤナギ科を勧められた．牧野富太郎先生から「早田のテーマとしては近来の傑作である」とお墨付きをいただいたそうで，牧野先生曰く「是非ともヤナギをやれ．ただしヤナギというやつは実にイヤなものだ．自分は若い時分にヤナギでミソをつけた．オノエヤナギは四国では高い山に出てくるので，「尾上ヤナギ」*Salix shikokiana* Makinoという新種として植物学雑誌に発表した．それは春の葉の時期のものを調べたためで，今日のオノエヤナギと同種のヤナギは当時*Salix opaca* Andersonで，それは夏の葉で記載されたものであった．ヤナギは春から夏にかけて葉の形も大きさも変わるので，ついうっかりすると騙される．それで余程用心しないといかん．君は10年か15年は就職しないで一生懸命に全国をかけまわってヤナギを集めなさい．それで10年か15年して日本のヤナギが解ったなと思ったら君は学者として見込みはない」（菅谷 1963）．木村先生はこれはとんでもないテーマだと思ったそうだが，偶然にもヤナギの葉の二形性を記載したイギリスの論文を既に読んでいたこともあって，「よしそんなに難しいものなら一つやってやろうという気持ちになった」とのことである．先生のヤナギ研究は1923年に始まったことになる．先生はまず「厳重な採集」を始める決心をされ，ヤナギの個体に番号をつけて同じ個体から時期を変えて標本を作り続けることを実行された．九州からカラフトまで全国のヤナギに番号札をつけて歩かれたという（元村 1963）．東北大植物園に日本だけではなく世界各地のヤナ

ギを植えられ，それらの個体から毎年多くの標本を最後まで作っておられた．

先生はヤナギ科の分類体系を1938年に発表された．ヤナギ属もヤマナラシ属も細分する立場であった．その後は種と雑種を整理し続けた．先生にヤナギ科をまとめて欲しいと望んでおられた前川文夫先生や原寛先生は，私にそう申し上げるよう時々お命じになった．とうとう1986年に2編と1988年に1編ヤナギ科の体系をお書きになった（Kimura 1986a, 1986b, 1988）．先生86歳と88歳の時で，ヤナギ属とヤマナラシ属を広くとる意見も認めるというお考えを発表された．原先生と私にも謝辞をいただいたが，先生の最後の論文となった．これらの論文は原先生のご依頼で平凡社の野生植物樹木（佐竹他編1989）にヤナギ科をまとめた機会に書かれたものである．ここでは木村先生が初めて日本のヤナギ科の全種を扱った．しかし，先生がよく研究されていた雑種についてはここでお書きにならなかった．雑種は面白いと私に答えて言われたことがあったが，先生は厳密な同定者であった．先生は従来の知識を本にまとめたり，解説書を書いたりするよりも，研究がお好きで，原著論文を発表することを心掛けておられた．

木村先生には74編の著作があり，宮城県の文化財保護委員としてまとめられた宮城県北部海岸，蔵王山，松島のそれぞれ植物調査結果を除くと，71編の中，4編以外はヤナギの論文である．先生は弟子にヤナギ科の種を対象とした分類よりも，ヤナギ科分類体系のための分類形質の研究をテーマとして与えた．花被を菅谷貞男，材を小倉英男，胚発生を木村中外，染色体を須田裕，などの成果が発表されている．私は昭和33年4月東北大学理学部に入学して直ぐに，高校生の時に前川先生に木村先生のことを紹介されていたので，生物学教室へ木村先生をお訪ねした．ヤナギの分類を勉強したいと申し上げたところ，「始めからヤナギだけを勉強すると，私みたいに偏った研究者になるから，まずフローラをやりなさい」と言われ，以来ヤナギの分類から離れてしまったが，適切なご指導であったと感謝している．

終わりに先生のお人柄を示すいくつかの事柄を紹介したい．木村先生は世界で最も原始的なクモの一種キムラグモの発見でも有名で，クモ学会会員であった．昭和30年にご進講なさって以来，昭和天皇を深く尊敬され，植物学のお相手を永く勤められた．東北大退官後は特に天皇のご著書，那須，伊豆，皇居の植物の完成をお助けした．本がお好きで，ドイツの古本屋や丸善から分類学の本を随分買われたが，ご自宅に置かれた蔵書は戦災で失われた．教室所蔵の中にはEnglerの蔵書票のついたものが残っている．文字，言葉，文章に深い関心を持っておられ，正確で立派な日本文を書き，ラテン語やドイツ語は自由に読んでおられた．ギリシャ語もおできになった．趣味も広く，写真，絵，民芸品がお好きであったし，美に対して独自の眼力を持っておられた．先生の絵心はご論文の図，写真の美しさに遺憾なく発揮されている．

先生が最も力を尽くして集められたヤナギ科標本は東北大学理学部生物学教室植物標本館（TUS）の中にKimura Salicaceae herbarium（TUS-K）として，独立に保存することとした．今後先生の標本が大いに活用されヤナギ科研究が発展することこそ先生の最も望まれていたことではないかと考えている．

引用文献

Kimura, A. 1986a. De *Salicis* subgenere *Protitea* commentatio. Sci. Rep. Tohoku Univ. 4th ser. (Biol.) **39**: 67－70.

Kimura, A. 1986b. Addenda et emendanda ad systema *Populoidearum* anno 1938 ab auctore propositum. Sci. Rep. Tohoku Univ. 4th ser. (Biol.) **39**: 71－74.

Kimura, A. 1988. De *Salicis* subgenere *Pleuradenia* commentatio. Sci. Rep. Tohoku Univ. 4th ser. (Biol.) **39**: 143－147.

木村有香．1989．ヤナギ科．佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫（編）日本の野性植物 木本 I. pp. 31－51.

元村 勲．1963．木村有香さん．会報．復刊第11号．畑井先生追悼号．pp. 95－96．東北生物学同窓会．

大橋広好．1987．東北大学理学部の新ハーバリウム．植物研究雑誌 **62**: 351－352.

菅谷貞男．1963．木村有香先生御退官によせて．会報．復刊第11号．畑井先生追悼号．pp. 91－95．東北生物学同窓会．

（大橋広好）